

ボワギュベールの社会的均衡の理論

米 田 昇 平

1. 序

フランス17世紀末は、史家によって17世紀ヨーロッパの一般的危機と呼ばれる⁽¹⁾事態の進行とともに顕在化してきた経済社会の自律化傾向と、絶対王政の最盛期を画したコルベルティスムによる国家主義的な干渉政策との相克が、一つの頂点に達した全般的危機の時代であった。しかるに良き後継者に恵まれなかったコルベルティスムは、既にフランスの危機的状況を救済する能力もヴィジョンも持ち得ず、増大を続ける王室財政の赤字を繕うことだけを念頭に置いて諸々の貨幣造出策に汲々たるありさまであり、混乱に拍車をかけるばかりである。このような事態に際し、コルベルティスム批判が、様々な思想的、宗教的伝統の上に、⁽²⁾経済社会の科学的分析という新たな武器を携えて復活する。中でも最も有力な批判者の一人として登場したのがボワギュベールであった。

ボワギュベール Pierre le Pesant de Boisguilbert は、1646年2月17日ルーアンの新興貴族の家柄に生まれた。学業をルーアンのイエズス会の学院で始め、次いでパリに出て法律を学び、弁護士資格を得た。そしてギリシャ文学の翻訳、歴史小説の発表等、文学によって世の中に出ようとしたがこれに失敗、1676年には郷里に帰り、1678年、モンティヴィリエ子爵領の判事職を購入、次いで1690年にルーアンの初審裁判所司法総監 Lieutenant Général の職を購入し、一時的な中断はあったものの終生この職席にとどまり、1714年10月10日に没した。⁽³⁾

彼の略歴は以上のようなものであるが、この間、1695年にルーアンで『フランス詳論』Le Détail de la France（以下「Détail」と略記）を M. de S. と

いう匿名で出版し、税制改革を唱える時論家として作家としての経歴を出発させた。次いで1706年にはより実践的な『フランスの弁護』Factum de la France が、同様に匿名で出版され、更に1707年に上記の2著に別冊を加えて、やはり匿名で『現世治下のフランス詳論』Le détail de la France sous le règne présent, 2 vols. を出版したが、これはヴォーバン Vauban の『国王10分の1税案』Projet d'une dixme royale と共に発禁となり、彼はオーヴェルニュに6ヶ月の追放に処せられた。この著作集には別冊として『穀物の性質、耕作、取り引き及び利害に関する試論』Traité de la nature, culture, commerce et intérêt des grains 並びに『富、貨幣及び貢納の本質に関する論考』Dissertation sur la nature des richesses, de l'argent et des tributs (以下「Dissertation」と略記)の注目すべき2論稿を含んでいる。⁽⁴⁾

さて、ルーアンの農民の惨状をまのあたりにして、改革者たらんと熱望した彼は、フランスの厚生を減退を招いた元凶を、低穀価政策、産業規制政策、及び税制の欠陥等、要するに彼によればコルベルティスムに由来する諸々の悪弊に求め、これを痛罵する。それが悪弊である所以は、経済社会全体の釣合 proportion を無視し、その構成要素間の紐帯を寸断している点にある。つまり彼の見るところ、今日200種ほどに増えた「あらゆる職業は、1国においてどのようなものであれ、相互に働きかけ、かつ相互に支えあっている」⁽⁵⁾ から、「1つの職業が消滅してしまえば、衝突した船の中の1艘に、火薬に火をつければ、全ての船がもろともに爆破してしまうといった事態が生じるであろう」⁽⁶⁾ が、コルベルの後継者達はまさに各所の火薬庫に火を点じて回っているようなものである。つまり、ボワギューベールは、国民相互の有機的連帯によって成立する国民経済を念頭に置いて、それが内包するシステムを破壊するものとしてのコルベルティスムの経済的国家主義を論難したのであったと言えよう。こうした社会的連帯性の認識に基づいて彼の目指したものは、生産、流通、消費の循環システムを内蔵する経済社会の安定的な均衡の実現であり、それによって可能となるはずの最大限の一般的富裕の達成であり、これを保証する制度の確立であった。

本稿は、以上のように税制改革家としての時論的意図に導かれつつ、疎略ながらも経済社会の律動の原理を明らかにしようとしたボワギューベールが、近代社会の分析理論としての経済科学の黎明を告げ得た一人であることを、彼の本質的論点と考えられる社会全体の調和的均衡の概念を吟味することによって検証しようとするものである。

- 注(1) H. R. Trevor-Roper, "The General Crisis of the 17th Century," *Past and Present*, No. 16, (1959). 等、今井宏編訳『17世紀危機論争』（創文社、1975年）に所収。他にも Jan de Vries, *Economy of Europe in an Age of Crisis, 1600-1750* (London-New York-Melbourne, 1976) 参照。
- (2) この点については、Lionel Rothkrug, *Opposition to Louis XIV, The Political and Social Origins of the French Enlightenment* (Princeton, 1965) を参照。
- (3) ボワギューベールの詳しい経歴に関しては、J. Hecht, "La vie de Pierre le Pesant, Seigneur de Boisguilbert," dans I. N. E. D., *Pierre de Boisguilbert ou la naissance de l'économie politique* 2 vols., (Paris, 1966) pp. 121-244 を参照。
- (4) 本稿は、パリの L'Institute National D'études Démographique, によって編集出版された上述のボワギューベール著作集第2巻に収められたテキストを使用している。ボワギューベールに関する文献案内もこの版に詳しい。
- (5) Boisguilbert, *Dissertation*, p. 986.
- (6) *Ibid.*

2. ボワギューベールの社会的均衡の理論

(a) 富論及び貨幣論

「永遠不変であり得るような富を真に獲得しようとする場合に生じる誤りは、まず第一に貨幣の観念におけると同様に、富裕について抱かれている観念において誤っていることに由来する。』⁽¹⁾ 経済社会において、安定的、継続的な均衡を実現しようとする際に、その障害となっている諸種の要因の中でも、最も基本的な誤解としては是正すべきは、富及び貨幣に関する誤った観念であった。

彼にとって「人を絶対的に富裕にするものは、支配される国の広さでも金銀の量でもなく、⁽²⁾ 真の富は「生活必需品のみならず、一切の余分品及び官能を満足させ得る全てのものの全き享有」⁽³⁾ にあった。従って人間の欲望を充足させ得る全ての財が富である。しかし全ての富が同じ効用、あるいは重要性をも

つ訳ではない。余分品等は「必需品に余剰が生じて、殆んど必要とは言えないような財を手に入れることができるようになるにつれて存在する」^{〔4〕} にすぎない。結局富は本質的に次の2つに大別される。即ち基本的かつ優越的な富としての「土地の果実」le fruit de la terre＝農産物と、それ以外の一切の富を総括するところの「勤労の財」le bien d'industrie である。後者は常に前者に従属的である旨を彼は次のように述べている。

「土地の果実の余剰 l'excroissance が、弁護士、医者、役者、そしてどんなものであれ工芸や手工業に従事する零細な工匠達などにも職を与えるのである。従って肥沃な地方ではその種の人間は数多く居るのに対して、不毛な地方では彼らはきわめて僅かしか見られない。」^{〔5〕}

農産物の余剰の程度に応じて、非農業者の存在の規模、従って彼らの生産する財及び用役の総量が決定されるということになる。こうした農産物余剰の経済的重要性への着目は、彼の全所論の出発点であり、後で見るように、王国の再建には農業の復興こそが急務であるとする主張の前提をなすものである。

ところで、使用価値を有する一切の財が富であるにせよ、国富の観点からこれを考える時、それだけでは十分ではない。つまり財は交換関係を通じてその使用価値を実現させることによってはじめて富としての実効を持ち得るにすぎない。「この世のいかなる財も消費されるのでなければ無用である。」^{〔6〕} 消費されざるぶどう酒は腐敗し、穀物は肥料と化してしまうだろうし、生産自体が休止されるだろう。従って財の生産が国富の増大を保証するためには、何よりそれらが消費されることが必須である。換言すれば、消費の欠乏こそが、フランスの衰退を招き、潜在的な国力の顕在化を妨げている最大の原因であった。^{〔7〕}

ボワギュベールは、財の生産能力を解放し、もって国富を増大させるための起動力として消費購買力、特に優越的な富である農産物の需要の増大を力説することになるであろう。この時貨幣は、コルベルティスムにおけるのと全く異った役割を担っている。

ボワギュベールは世上に流布している貴金属至上主義が、貨幣の本質からいかに程遠いものであるかを、随所で実に執拗に論じているが、世人の富と貨幣

を混同した謬見に対し、彼は次のように論断する。「(経済規模の拡大とともに)貨幣が世の中で必要とされたのは、せいぜいのところ相互の商品の交換や交付の保証としてであるにすぎない。」^[8] 貨幣は「保証つきの委任状」la *procuracion avec garantie*,^[9]あるいは「腐敗せざる担保」un *gage incorruptible*^[10]であって、商業が盛んであれば、一片の紙券 un *morceau de papier* でさえその代わりを立派に果し得る体のものにすぎない^[11]のに、現実には「商業の奴隷たるものが商業の専制者となしている。」^[12] 貨幣はそれ自体では絶対に富などではなく、そもそもフランスは「かつてなかった程に潤沢な貨幣をもっている」^[13]ではないか、この点からもフランスの衰退を貨幣の欠乏に帰因させる俗論ほど笑止なものはない。

結局、「貨幣とは手段及び経路 le moyen et l'acheminement にすぎず」,^[14]従って彼の貨幣論議は手段としての貨幣がその唯一の職能をどの程度に果しているかという問題、即ち貨幣の流通速度の問題に帰着する。上述のように彼にとっては貨幣の流通は生産物の流通の反映にすぎないから、貨幣の流通速度は消費水準と表裏一体の関係にある。つまり「十分な消費が存在する場合の100万リーブルは、消費が行なわれない場合の1000万リーブルよりも大きな効果をもたらす。というのはこの100万リーブルは1000回も更新され、その運動の度にそれだけ多くの所得を作り出すからであり、また金庫に眠っている1000万リーブルは、石ころ同然に国家の役に立たないからである。」^[15]

彼は金庫に眠っている石ころ同然の貨幣を「死せる貨幣」l'*argent mort* 一瞬たりとも停止せず運動を続ける貨幣を「生ける貨幣」l'*argent en vie* とも呼んでいる^[16]が、貨幣をそうした死せる状態に追いやるのは、消費の沈滞であるにせよ、同時に誤った拝金主義の虜による貨幣保蔵癖もまた重要な要因であるとして彼らを攻撃し、翻って大衆の消費購買力に注目している。細民 le *menu peuple* は圧倒的多数を占め、かつ蓄積の余裕もなく日常の生活必需品の確保にかつかつたるあり様であるから「1エキュは貧しい人々の1日分の方が、豊かな人々の3ヶ月分よりも多くの販路を、従ってより多くの消費をつくり出す。」^[17] 消費の奴隷たる貨幣の手段としての職能を十全に機能させるための

条件は何より消費の解放であることは言うまでもないが、同時にそれは消費性向の高い一般大衆の可処分所得を増大させる方向で実現されねばならないのである。⁽¹⁰⁾

注(1) Boisguilbert, *Dissertation*, p. 973.

(2) *Ibid.*, p. 974.

(3) *Ibid.*, p. 985.

(4) *Ibid.*

(5) Boisguilbert, *Détail*, p. 583.

(6) *Ibid.*, p. 590.

(7) 「フランスの衰退の原因を見い出すためには、消費の減退の原因を明らかにしさえすればよい。」(*Ibid.*)

(8) Boisguilbert, *Dissertation*, p. 976.

(9) *Ibid.*

(10) Boisguilbert, *Détail*, p. 617.

(11) *Ibid.*, p. 613. 或いは *Dissertation*, p. 978.

(12) *Ibid.*, p. 975.

(13) Boisguilbert, *Détail*, p. 587.

(14) *Ibid.*, p. 618.

(15) *Ibid.*, pp. 619-620.

(16) 1704年7月1日付けの書簡, dans I. N. E. D., *op. cit.*, vol. 1, p. 302.

(17) Boisguilbert, *Détail*, p. 621. ボワギュベールの眼中に投資家の姿はない。

(18) *Ibid.*

(19) 彼はまた「貨幣の不断の運動は、貨幣が可動的であり、かつ人民の手中に帰する場合に限って存在し得るにすぎない。」(*Ibid.*)と述べている。

(b) 国民所得論

前項で見たように、人間の欲望を充足させる財一般が富であるにせよ、実質的には財は消費されてはじめて富としての実効をもつにすぎなかった。そして商品交換経済の時代においては消費と販売は常に一体であるから、販売を通じて稼得させる貨幣額としての所得は「消費と一つのものであり、かつ同じことであって、消費の破滅は所得の破滅である。」⁽¹⁾「貨幣はそれが流通する限りの所得を形成する」⁽²⁾が、消費の欠乏によって貨幣の流通頻度が低く押さえられてしまえば、それだけ所得は減少するという訳である。つまり彼にしてみれば、

消費と販売の媒介を唯一の職能としても貨幣のタームで表示される所得とは、消費と販売の水準を計ることによって、社会的に実現された実質的な富のヴィジブルな表現であった。換言すれば、国民所得とは国富にはかならない。

こうした所得は次の2つに区別される。「土地所得」le revenu de fonds と「勤労所得」le revenu d'industrie である。前者は言うまでもなく「土地の果实」の販売によって得られる貨幣価値であり、土地所有者の手中に帰す。後者は「勤労の財」の生産に与った非農業者の所得のみならず、「土地の果实」の生産に、従って土地所得の形成に自らの「勤労」によって参与する農業者 *laboureur* の所得をも含む。

「土地の果实」が基本的かつ優越的な富であったように「土地所得」は「勤労所得」の源泉であり「勤労所得は土地所有者やその債権者が土地から土地所得を手に入れる限りにおいてのみ実現し、また変動するにすぎない。」^[3] 従って、働かずして勤労の果实の一切を収奪する地主階級が、しかも所得の形成において主導的役割を果たすのである。これは彼にとっては必ずしも本意ではなく、ただ歴史的因果によって、重要な土地所得の取得者が地主であるにすぎず、しかも富裕者の貨幣保蔵癖を考えれば忌うべき歴史である。彼は神の命に背いて今日では「何も作らずしかも一切の楽しみを享受している者と、朝から晩まで働いても必要なものをどうにかこうにか手に入れているにすぎず、多くの場合それさえ完全に奪われている者との2つの階級」^[4] に完全に分化してしまったことを嘆いている。そして、土地所得は確かに主導的役割を果たすが、後述のように常に勤労所得と相互規定的であり、後者の減少はそれだけ勤労大衆の消費購買力を弱体化させ、その結果前者をも相乗的に減少させるというのが彼の立場であった。従ってこの点、純生産物の貨幣価値としての土地所得を唯一の所得と考え、これの取得者である地主の支出に着目して彼らを積極的に擁護する F. ケネーとは違っている。いずれにせよ飽くまで時論的態度を崩さない彼の窮極の目標は「現状に何ら混乱を招くことなく」^[5] 現実に支配的なシステムの運用を通じて最高度の一般的富裕 *l'opulence général* を実現することであった。

さて、現実を支配するシステムの基軸は、土地所得と勤労所得の循環であり、土地所有者と勤労大衆との相互交渉である。この循環において、土地所得が主導的役割を果たす次第は次の通りである。

「かつて1000リーブルの地代を得ていた人々がもはや500リーブルしか受領しなければ、彼らはかつての半分の労働者にしかもはや職を提供しない。そして、土地が運動を始めるのであるから、生産される農産物を外部に持ち出すことによって形成される貨幣は、その循環が終了して土地に戻る前に無数の人々の手を経ているはずであるが、そうした自然的循環 *une circulation naturelle* によって今度はその労働者達が自らの必要品を手に入れていた相手方の人々に対しても同じように振舞う。かくて…土地において無駄となった年500リーブルの減少は国家に年3000リーブル以上の減少をもたらす。」^[6]

ここに、土地所得を起点として貨幣がそれぞれの勤労者の手を経て、最終的に再び土地所得として土地に戻るという循環図が描かれており、粗略ながらもケネーの「経済表」を先取りしていることは明らかである。^[7] そして「貨幣はそれが流通する限りの所得を形成する」のであるから、貨幣のフローの総量がフランスの所得、つまり国民所得を形成する。既述のように国民所得とは国富にははかならなかつたから、一般的富裕の増進はこうした国民所得の形成メカニズムを十全に機能させることによって可能となるはずである。

しかし、土地が起点でありかつ終点であるにせよ、現実のシステムの内実はいかにそれほど単純ではない。全てが相互連関的であり相互規定的であるというのが彼の社会認識であった。「人と人、職業と職業、地方と地方、王国と王国とのあの不断の混交」^[8] によって成立している現実の経済社会では「一つでも調和を欠けば、諸事情間の相互連関性が、全体系の破壊を引き起こす」^[9] だろう。彼は「*Détail*」の随所で釣合 *proportion* を欠いた一片の布告によって、いかにフランスが衰退してしまったかを悲憤慷慨している。^[10] 中でも生産物の自由流通が阻害される弊を次のように述べている。「(運送の中絶)は商品が交互に出入りする2つの地方に加えて、商品が通過する全ての地方にも関係する。…つまりそれは世の中全体にただちに波及するから…国家全体は莫大な損害を蒙

むるという事態が生じるであろう。¹¹⁾ 従ってシステムの円滑な運用には商業の自由が必須であり、この意味でまさに「農業と商業は国家全体の2つの乳房」¹²⁾である。

結局、現実の経済を支配しているシステムとは、農業を原動力に、そして商業を潤滑油として、あらゆる経済単位間を相互規定的に結合させながら、円環的な展開を見せるシステムであり、これの現象的表現が土地所得と勤労所得をめぐる所得循環であった。

注(1) Boisguilbert, *Détail*, p. 602.

(2) *Ibid.*, p. 619.

(3) *Ibid.*, pp. 603-604.

(4) Boisguilbert, *Dissertation*, p. 979.

(5) Boisguilbert, *Détail*, p. 626.

(6) *Ibid.*, p. 584. M. ルデック氏はここに乗数理論の先駆的表明をみている。M. Leduc, "Le mecanisme de multiplicateur chez les néo-mercantilistes de langue française au XVIII^e siècle," *Revue d'Economie politique*, mars-avril (1960).

(7) この点についてはこれ以上立ち入らないが、モリニエ氏はこの循環メカニズムを、地主・耕作者・商人の3者による三角関係として図式化している。以下の文献を参照。Jean Molinier, *Les metamorphoses d'une théorie économique, Le revenu national chez Boisguilbert, Quesnay et J. B. Say*. (Paris, 1958) 坂本慶一訳『フランス経済理論の発展』(未来社, 1962年) 60頁。Jean Cartelier, *Surproduit et Reproduction, La formation de l'économie politique classique* (Grenoble, 1976) pp. 33-35.

(8) Boisguilbert, *Dissertation*, p. 991.

(9) Boisguilbert, *Détail*, p. 638.

(10) 例えば「*Détail*」第3部第6章は「諸負担それ自体よりも有害な釣合の欠如」と題されその例が挙げられている。(*Ibid.*, pp. 638-641.)

(11) *Ibid.*, p. 639.

(12) *Ibid.*, p. 624.

(c) 比例価格論

このシステムは農業を原動力、商業を潤滑油とする所得循環の円環図として描くことができるにせよ、「200種もの職業が文明的かつ富裕な国家の構成に参

与している」^[1] ような多様化の時代に、交換関係の安定的な持続によって不断の生産を保証する条件とは何であるか、これを論ずるのが、彼の調和の認識に由来する「比例価格」論 *prix proportionel* であった。従って「比例価格」とはシステム自体の安定化条件、あるいはシステムの維持機能を果す諸々の要因を集約的に表現するものである。

彼曰く、システムの安定的な持続によって一般的富裕を増進するためには「全ての事物及び生産物が継続的に均衡状態にあり、かつこうした事物や生産物相互間に、またそれらを作りあげるのに必要であった費用に関して比例価格 *un prix de proportion* が維持されることが必要である。」^[2] これからも明らかのように、彼の言う「比例価格」とは一面で生産物相互間の均衡価格を、また他面では生産費補償価格を意味していた。

まず後者に関して言えば、費用を償うことのできない価格水準では生産は休止されてしまうとは彼の度々論及するところである。例えば、「果実の栽培は前払い *avances* の額に応じて実を結ぶ。…前払いは果実の売行には関係なくいつも同じ額であって、もし売行が費用を償うに十分でなかったならば、引き続いて同じだけの前払いは行なわれなくなり（生産は途絶してしまう）」^[3] 或いは価格が費用をはるかに上回る場合も「貧しい労働者は販売される酒類が異常な高値であるからには、水を飲んで我慢せねばならず…消費は全くの不振に陥ってしまう」^[4] が、これは生産物、費用ともども無駄になるという点で一層由々しき事態である。費用は補償されねばならないにせよ、では価格はいかなる水準において決定されるべきであるか。これに答えるのが「比例価格」の前者の側面である。しかし彼はこの点について、きわめて曖昧なままであって価格形成のメカニズムを分析しているとは到底言い難い。彼はせいぜい次のように述べるにとどまっている。「販売においても購入においても各人が等しく自己の帳尻を合わせること、つまり当事者間で利潤が正当に分配されることが必要である。」^[5]

比例価格の実体は、はなはだ不透明ではあるが、生産費用を補償しつつ同時に適正利潤の実現等によって、諸財間に過不足のない不断の生産を保証し続け

る限り、比例価格はまさに「一般的富裕の唯一の維持者」^{〔6〕}として、その重責を果たすことであろう。

注(1) Boisguibert, *Dissertation*, p. 986.

(2) *Ibid.*, p. 993.

(3) Boisguibert, *Détail*, pp. 584-585.

(4) *Ibid.*, p. 603.

(5) Boisguibert, *Dissertation*, p. 982.

(6) *Ibid.*, p. 995. 尚、比例価格論からボワギューベールを論じた久保田明光氏の先駆的業績がある。久保田明光「ボワギューベールの『比例価格』論と均衡理論」(『近世経済学の生成過程』理想社、1942年)

(d) 社会的均衡論

富論よりはじめて、貨幣論、所得論、価格論と次々にその概要を明らかにしてきたが、これらは全て彼の自らに設定した課題に答えようとする一貫した意図に収斂していく。言うまでもなく一般的富裕の増進である。つまり、40年前にコルベールが財務長官に就任して以来の誤りに満ちた諸政策によって「現在では「(国土は) 半分が有効であるにすぎず、残りは或いは完全に放棄され、或いは能力ほどにはとても耕作されておらず」^{〔1〕} 要するに「一切は半減してしまった」^{〔2〕} が、こうした衰退を招いた原因を究明し、これを除去することによって「40年前の状態に復すること」^{〔3〕} 或いはむしろ、この議論と常に表裏一体であるところのフランスの潜在的国力を十分に顕在化して、一般的富裕を最高度の水準で実現すること、これこそが彼の終始一貫した目的であった。

そして彼はコルベルティスムの破産の原因を、その推進者達が、現実の商品経済社会のシステムを看破し得なかった点に求め、このシステムの分析を通じて、要するに次のような理想的経済像を描くことによって所期の課題に答えようとするのである。つまり、各経済単位が相互に連帯的な経済社会のシステムが、原動的、潤滑油的、安定的条件がことごとく満足されることによって、円滑かつ十全に機能しておれば、能う限りの土地が耕作され、最大限の農業生産、それに相応して最大限の手工業生産が相互に過不足なく連関し合うことによって、フランスの潜在的国力は十分に顕在化され、最高度の一般的富裕が実現さ

れるはずである。一片の未耕地も一人の零落者も存在しない真に安定的な言わば社会的均衡の状態に到り、攪乱の要素の出現しない限り、この均衡は継続的でもあろう。⁽⁴⁾

しかし現実の経済には障害が満ち満ちている。税制の欠陥、商工業規制、低穀価政策等である。彼によれば、こうした制度的与件が一体となって消費を減退させたが故に、国富はその実現を妨げられ、半減してしまったのである。

「土地生産物が販売価格の点で下落し、並びに余剰量の点で下落したために、フランスのあらゆる所得は減少を蒙っている。(どちらも)消費が十分でない結果である。消費も同様に半減してしまった。」⁽⁵⁾つまり、消費購買力の減退によって価格水準が下落したために、農業生産は沈滞し、これに完全に依存するあらゆる所得が減少してしまったのである。「中等の土地の耕作は途絶され、各地で最良の土地が疎略に扱われているだろう。」⁽⁶⁾まさに、数多くの未耕地や零落者の群れと悪しき制度によって恩恵を蒙む一握りの人々の奢侈が共存する現実の社会がこれである。従って現状の改革には何よりも農産物需要を喚起することが必要であった。

結局、彼は理想的経済像として描かれた円環的な再生産の図式を念頭に置いて、現実のシステムをよく把握し得ない諸政策によって制約されている消費購買力を解放し、もってシステム活性化の喚起力とし、螺旋状的な再生産運動によって、やがては安定的・継続的な円環運動にまで上昇すべきことを主張したのである。換言すれば、システムの円滑にして十全なる機能を保証する諸条件の成立が阻害されているという事態を集約的に表現するものが、消費の沈滞にほかならなかった。従ってこうした諸条件の成立を促すことと消費の解放とは同義であり、この意味で消費の解放が、螺旋運動を始める起動力として主張されているのである。

彼の描く理想図と現実図は以上のような形で統合されていると考えられる。そしてこの両者、並びに両者の統合を大枠において根拠づける原理が、彼の自然的秩序への信頼に基づく自由主義の哲学であった。相互に過不足を補い合っているような交換経済社会は、自然的秩序として、それ自体自律的・調和的な

メカニズムをもっているから、人為を企てずに、ただ自然の成り行きに任せておけば *on laisse faire la nature*⁽⁷⁾ 安定的な秩序は損なわれない。例えば個々人の個人的利益の追求は、個々人間の相互連帯性によって結局は「常にその際立った効用を当てにせねばならないところの一般的厚生 *le bien en général* を形成する」⁽⁸⁾ であろう。つまり現実図はそうした自然的秩序からの乖離⁽⁹⁾ として、理想図はその十全なる反映として、また両者の統合自体も、自然的秩序が顕現する過程として描かれているのである。こうして彼の論ずる社会的均衡とは自然的均衡にはかならなかった。彼は次のように述べている。

自由の保証された自然は「全ての生産物の間の交渉と価格の釣合を回復するだろう。そうなれば際限のない流転 *une vicissitude perpétuelle* を通じて、生産物は絶えずお互い同士を創出せしめ、かつ相互に維持し合うことによって、各人が自己の労働或いは地所に応じて手に入れる富裕が一般にわたって形成されるだろうし、それは常に増進的であって、こうした全ての源泉が湧き出づる土地が、もはや提供することのできない水準の富裕にまで到達するから…全ての事物が自然によって付与された限りの価値を実現させた場合のどんなにか豊かな富が、現実にも目の前にある状態を想定することができる。」⁽¹⁰⁾

注(1) Boisguilbert, *Détail*, p. 589.

(2) *Ibid.*, p. 585.

(3) *Ibid.*, p. 633.

(4) 互いに過不足を補い合う職業間の相互連帯性が正常に機能すると考えられるこうした均衡点においては、過剰生産の可能性は否定される。H. ドゥニ氏はここに着目して、ボワギューベールに「賤路法則」の最初の表明をみている。Henri Denis, *Histoire de la pensée économique*, (Paris, 1977) pp. 140-146.

(5) Boisguilbert, *Détail*, p. 590.

(6) *Ibid.*, p. 615.

(7) Boisguilbert, *Dissertation*, p. 993.

(8) *Ibid.*, p. 991.

(9) 既述の貧富の差といった社会的矛盾も、彼にとっては商品経済に固有の矛盾というよりは、商品経済の展開が、本来あるべき自然的秩序からの乖離という歪められた形で行なわれたことの結果にすぎなかった。

(10) *Ibid.*, p. 1007.

3. ボワギューペールの評価

以上述べてきたように、彼の挑んだ対象は、コルベルティスムによってはもはや対処し得ない時代の変容であった。新時代の到来を予感させる⁽¹⁾ この変容を最も特徴的に表現するものが、彼によれば、社会的連帯性を基軸に据える交換関係の全面的展開である。そして彼の所説を秩序の理論として読み返せば、彼は個々人が各自の自由意志で経済行為を営むような交換経済社会と言えども、自ずから安定的な秩序を維持し得る旨を、この経済社会を支配するシステムの内実を吟味することによって明らかにしようとしたのであったと言える。つまり、彼の描く理想図と現実図を二重写しすることによって浮かび出てくるものは、社会全体の自然的均衡、或いは調和的均衡という、はなはだ楽観的、調和論的なヴィジョンであった。しかしこのヴィジョンは、経済的相互依存性の認識に基づいて行なわれる均衡の内在的システムに関する諸々の分析を通じて、一定の科学性を帯びている。そこに彼の独創性を見出すことができよう。そしてこの内在的システムの分析に関して言えば、貿易戦争の様相を呈しているこの時代、重要視されてしかるべき外国貿易を相対的に軽視していること、極端なまでの貨幣観等、彼の所説はきわめて観念的であった。時論家として出発しながらも、彼の具体的な政策的提言はほとんど現実性を持ち得なかったのである。

しかし逆説的に言えば、彼の所説はその分だけ供給システムと需要システムが、社会的要因によって同時に決定されるメカニズムを疎略ながらも明らかにすることによって、経済学の黎明を告げ得たと同時に、その後のフランス政治経済学の展開の可能性を様々に示唆していると言えよう。

注(1) 例えば彼は、課税目録上の職業人の分類において、一般通用の身分、地位に応じた分類と、その職業の担税能力、つまり経済的实力に応じた分類とを併用しているが、これなども彼の時代の過渡的現象を表すものとして興味深く思われる。Boisguilbert, *Détail*. p. 630.